

テキストマイニングによる記述答案の分析

「キャリアデザイン」授業を通して得られた資料

松 本 幸 一

キーワード：テキスト分析、計量言語、語用

1. はじめに

本稿は、「キャリアデザイン」授業で学んだ内容について、学生に対し設定された課題テーマに対する記述試験を課して、それらを KH Coder¹を用いて語彙上の結束性²を分析したものである。ここでは、記述式試験の結果つまり成績を目的変数として、記述にみられる語彙上の結束性や他の要因を説明変数として扱う。分析の結果から、文章作成能力の差異がコロケーション³と関係しているのか、ループリック⁴を用いた採点による記述式試験の答案に対する考察を行っている。

コミュニケーション能力（本文中では「能力」と記す）が、企業側にとって大学生の採用基準のなかで高い位置を占めており、仕事をする上で重要な力として求められる傾向にあると言ってよい⁵。また、「能力」に置かれる企業側の期待とは一部団体から求められるものではなく、経済産業省や文部科学省からも重要視する動きが続いている。社会人基礎力に関わる報告書のなかでも、「能力」に関する言説が随所に見られ、文部科学省においても「能力」を育成するための推進会議⁶が過去設立されていた。しかし、「能力」を育成することや「能力」を判定することは、多様な定義づけや方法論があり扱いが難しいところが

ある。そのうえ、企業から採用される学生にとって「能力」の獲得法や力が備わっている自覚が、学生自身でしっかりと認識できていないという課題が見受けられる⁷。従ってこれから将来に向け、「能力」が社会から求められることに変わりないであろうから、その育成方法や評価方法を理解し開発する仕組みづくりを行う必要がある。そこで、ここで「能力」の定義をいったん絞り込み、ある「特定の言葉」を説明する意味のある文脈を作り出すための、「能力」要素であるディスコース・コンピテンス⁸に注目してみた。上位語にあたる「特定の言葉」を説明する過程を通して、ディスコース・コンピテンスを育成しつつ評価することが、「能力」の育成に関連性があるのではないかと仮定したのである。

良い記述答案や自己PR文書は、自分で考え自分自身の「言葉」で書くものと言われる場合もあるが、その説明自体が非常に曖昧な定義付けとみなされてしまう。「言葉」を定義するとは、「言葉」の意味を明確に定めて相手と自分との間で「共通の前提」にすることであり、そこから正しい文脈ができあがりコミュニケーション能力が向上する。「言葉」には多くの定義があり、人により定義が異なるのがむしろ普通である。だからこそ、社会人として課題を解決するため議論をするときには、「言葉」の定義が「共通の前提」になっていないと定義が隠れた前提になってしまう。そこで「言葉」の定義に隠された基準について、本稿ではテキストマイニングの手法を活用し、それらを可視化するとともに教授法や教材作成の改善にもつなげたい。

2. 厚生労働省によるキャリア教育

厚生労働省の平成26年度委託事業として、大学等において効果的なキャリア教育を実施するため、キャリア・コンサルティングのツールやノウハウなど、代表的な大学教育プログラムをまとめた事例集が報告されている⁹。大学設置基準改正により、平成23年度からすべての大学に対し「社会的・職業的自立

に関する指導等」(キャリア教育)を大学教育の一環として実施を義務付けてから、約3年の年月を経ての報告事例集である。平成27年3月には、大学生のための「キャリア教育プログラム集」が刊行されたため、平成26年度の委託事業は「キャリア教育プログラム集」を作成する前提で、厚生労働省や検討委員会そしてシンクタンクが協力し取り組んでいたものと思われる。プログラム開発の趣旨は、既存のキャリア教育プログラムの拡大を図る大学等への提供を目的と謳われている。しかし、裏を返せば各大学等のキャリア教育プログラムは、ばらばらの価値基準で運用されてきたともいえる。そこで、キャリア教育の定義をできるだけカリキュラムを通して、具体的な説明ができるようここで試してみる。なぜなら、本稿であつかうキャリア教育のプログラムが、どのような立ち位置で行われているのか、基準を明確にしておく必要があったからである。

厚生労働省平成26年度委託事業の事例集にある大学は、「宇都宮大学」「広島大学」「法政大学」「京都産業大学」「関西大学」「九州産業大学」の6大学であり、独自の工夫のあるキャリア教育プログラムを紹介することが目的とされている¹⁰。各大学でどのような教材を活用したかが、プログラムを運用する上で重要なところであろうから、各内容を概観していくことにする(図表1)。

ここで選定された大学の条件は、①大学で実施されるキャリア教育において、職業情報を提供しつつ仕事理解を促し、自己理解、ワークルールの理解を行っていること。②あるいは、各種ツールを活用しているなど、学生の適切な職業選択につながるような、独自の工夫あるいはキャリア教育プログラムを実施していることにある。ここで取り上げたキャリア教育プログラムは、結果的にすべて半期15コマ(90分×15回)のものとなっている。つまり、幅広い大学等で転用できる「職業情報」「職業選択」が入った、キャリア教育プログラムだといえる。次に、この事例集に記載されている事例の選定やとりまとめにあたっての方針を、資料の内容をそのまま引用してみる。

図表 1 キャリア教育の授業に取り入れているツール

	既存のもの	独自開発のもの	参考資料
宇都宮大学	キャリアマトリクス		阿部正浩他(2010)『キャリアのみかた 図で見る109のポイント』有斐閣 各種統計資料や文書資料
広島大学	森玲子(2010)『キャリアデザインノート 第四版』広島大学キャリアセンター (以前は、キャリアマトリクスを使用していた)	チェックリスト、ジョハリの窓、ホランドの6角形モデルなどを取り入れた教材	
法政大学	有田五郎他(2009)『実学キャリア入門：社会力を体感する』学文社	働く力教材ビデオ、リアクションペーパー	
京都産業大学	進路適性検査「Career Approach」、東田晋三(2008)『自分の説明書の作り方2010 - 就職活動を貴重な体験とするためのキャリアプランニングのススメ』近代科学社		
関西大学	DPT テスト、職業ハンドブック・職業ガイドなどの職業データベース、職業図鑑、各種資格ガイド	職業分野表(職業を12の分野に分け、各分野と関連の強い具体的な職業例をリストアップしたもの)、CAP システム	
九州産業大学	SPI 2 (代表的な入社試験) クレベリンや性格適性検査は導入していない(学生の思い込みや刷り込みになりがちのため)	統計データを多用したオリジナルのレジュメを作成し、使用している。	

資料出所：厚生労働省委託(平成26年3月)「大学におけるキャリア教育プログラム事例集」三菱 UFJ リサーチ & コンサルティングより筆者作成

注：教材の説明内容は、資料の語句のまま記載している。

事例の選定やとりまとめにあたっての方針

調査対象プログラムの選定について

- 6 事例ながら、国公立と私立、大学が立地する地域について、ある程度バランスに配慮して大学を選定した。
- キャリア教育として実施されている教育プログラムの中から、職業情報を提供して仕事理解を促しつつ、それだけにとどまらずに自己理解やワークルールの理解を行っているもの、あるいは各種ツールを活用しているなど、学生を適切な職業選択につながるような独自の工夫のあるキャリア教育プ

図表2 プログラム集の構成(ラインアップ)

A・自己理解(12本)

No.	テーマ	実施時期
A 1	職業興味と自己理解1 (理論と解釈)	1年後期～3年前期 (A 2、A 4又はA 5の前が望ましいが、後でも可)
A 2	職業興味と自己理解2 (職業レディネステストの実施)	1年後期～3年前期 (A 1の後が望ましい)
A 3	職業興味と自己理解3 (職業レディネステストの結果を使ったグループワーク)	1年後期～3年前期 (A 2の後)
A 4	VRTカードを使った自己理解1(興味)	1年後期～3年前期 (A 2の後が望ましい)
A 5	VRTカードを使った自己理解2(自信)	1年後期～3年前期 (A 2の後が望ましい)
A 6	VRTカードを使った自己理解3 (結果を使った分析)	1年後期～3年前期 (A 4又はA 5の後)
A 7	OHBYカードを使った自己理解の深化1 (OHBYカードの実施)	1年後期～3年前期
A 8	OHBYカードを使った自己理解の深化2 (OHBYカード実施後の発表)	1年後期～3年前期 (A 7の後)
A 9	働くための能力、興味、価値観を知る (キャリア・インサイト1)	2年～3年
A 10	働く時の行動特性や性格・傾向を知る (キャリア・インサイト2)	2年～3年
A 11	職業への興味や能力から適職を探す (キャリア・インサイト3)	2年～3年
A 12	将来のキャリア・プランを考える (キャリア・インサイト4)	2年～3年

ログラムに着目した。

事例の取りまとめ

- 本書で紹介するようなキャリア教育プログラムを導入しようとする大学等にとって参考となるよう、プログラムの配当を年次・学期、総時間数(6事例とも90分×15コマであった)、授業の構成(15コマの内容)などの詳

B．職業理解（11本）

No.	テーマ	実施時期
B 1	職業の中の仕事を探す （課業分析を通じて）	1年～3年
B 2	職業（アルバイト等）の職務分析	2年～3年 （B 1の後が望ましい）
B 3	職業インタビュー	1年～3年
B 4	職業の世界を知る （ハローワークインターネットサービスの活用1）	2年～3年
B 5	職業調べ （ハローワークインターネットサービスの活用2）	2年～3年
B 6	様々な働き方について学ぶ （TOKYOはたらくネット・ポケット労働法）	3年～4年
B 7	資格・免許について学ぶ （資格サイトの活用）	2年～3年 （B 3又はB 5の後が望ましい）
B 8	社会人インタビュー情報から学ぶ1	3年～4年
B 9	社会人インタビュー情報から学ぶ2	3年～4年
B 10	社会人インタビュー情報から学ぶ3	3年～4年
B 11	社会人インタビュー	3年～4年 （B 8、B 9、B 10のいずれかの後が望ましい）

細を紹介するようにした。

- 特徴的なキャリア教育プログラムが導入・実施されている背景には、その大学におけるキャリア教育についての考えや方針があることから、それらについても取材し紹介することとした。

まず、6事例という数の少なさについては、文脈からするとここでは大きな問題にはしていないように受け止められる。それから、プログラム内容の共通認識事項は「職業情報の提供」「仕事理解」「自己理解」「ワークルールの理解」などを通して、学生の適切な「職業選択」へ結びつくことへ力点を置いている。これらは、平成27年3月に厚生労働省ホームページのなかで、ダウンロード

C. その他(労働市場、労働法、ワークルールほか)(11本)

No.	テーマ	実施時期
C 1	ディスクジョッキーへの悩み相談 (事例を使った課題解決)	1年～3年
C 2	学生相談ケーススタディ	1年後期～2年後期
C 3	就労相談ケーススタディ	3年後期～4年
C 4	職業生活での様々な問題を考える (キャリアシミュレーション・プログラム)	2年～4年
C 5	労働問題アドバイザーになろう (アルバイト)	3年～4年
C 6	労働問題アドバイザーになろう (就職問題)	3年～4年
C 7	ワーク・ルールについて学ぶ (TOKYO はたらくネット・ポケット労働法)	3年～4年
C 8	就職率、離職率や労働市場について学ぶ	3年～4年
C 9	就職のための求人情報と応募書類について知る	4年
C 10	学生用ジョブ・カードについて知る	4年
C 11	職業訓練について学ぶ	3年～4年

資料出所：厚生労働省委託(平成27年3月)「大学におけるキャリア教育プログラム集」三菱UFJリサーチ
& コンサルティングより抜粋

が可能状態で保存されている¹¹⁾。つまり、厚生労働省主導で大学生のための「キャリア教育プログラム集」モデルケースが提示され、それらを容易に活用できるようツールが準備されていることがわかる(図表2)。

ここで、本稿の3.「キャリアデザイン」授業の概要で扱う内容と、厚生労働省が示した教育プログラムの共通性について言及しておく。まず図表1にあるツールの、宇都宮大学の参考資料『キャリアのみかた 図で見る109のポイント』と同じものを、本稿「キャリアデザイン」授業では用いている。この書籍は、労働経済学の分野から複数名の専門家の話をまとめた、労働統計などからキャリア形成に向けた概説書となっている。ややマクロ的な視点が強い

め、授業教室で扱う講師は噛み砕いて話を行う必要があり、この書籍単独での授業は成り立たないと思われる。したがって、図表2にある「自己理解」のレディネステストとグループワークが必要となる。内容面において6大学と比較すると全く同ではないものの、本稿で扱う「キャリアデザイン」授業では、独自のレディネステストを用いて授業を行っている¹²。また厚労省の「職業理解」については、社会人のインタビューや体験談などを通して、働くことへの気付きを啓発しているものがある。そこでこの点に関して本稿では、社会人講演会やビデオ視聴などを通して、学生に対する職業の理解を促している¹³。そして、「その他（労働市場、労働法、ワークルールほか）」については、雇用契約などの問題を事例集などから紹介し、グループワークを通して課題解決型の授業をすすめている¹⁴。以上のように、本稿で扱っている授業の方針や進め方は、通商産業省がモデル化した「キャリア教育プログラム」と、大筋のところ同じ方向を向いていることになる¹⁵。

3. 「キャリアデザイン」授業の運営法

授業の運営方法として、どのようなツールを順序立てて活用しているのか、骨格となる部分を中心に概説していく。なお、ここでは授業の中身までは立ち入らないので、シラバスについての言及は省略する¹⁶。

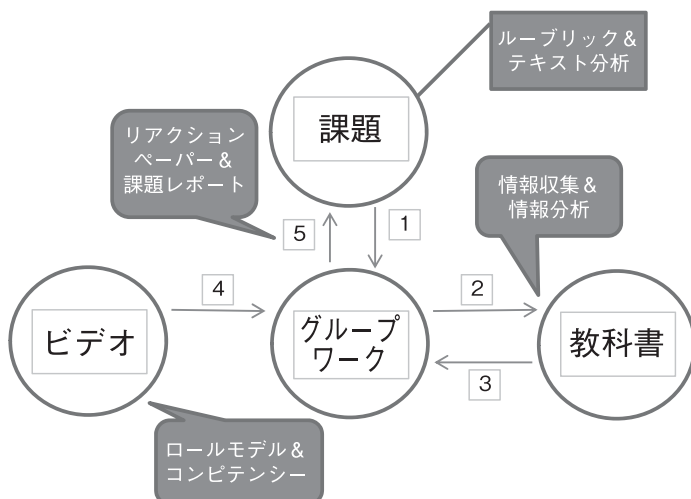
「キャリアデザイン」授業については、図表3の通り全学部生が必須の科目となっているため、好き嫌いで選択を回避することができない¹⁷。つまり、卒業がかかっている初年次の科目であり、約9割の学生が1回の履修で単位を修得している¹⁸。評価の方法や評価基準については、図表4の[5]リアクションペーパー¹⁹と課題レポートの実例²⁰を用いて、細かな評価基準を学生へ明示している。もちろん、結果至上主義に陥ると要領のよい学生が有利になるため、結果に至るプロセスがすべて連動する仕組みにしている²¹。それでは、図表4を用いながら授業の内容や取組について述べていく。

図表3 「キャリアデザイン」アウトライン

名称	「キャリアデザイン」	単位数	2 単位
開講学部	全学部	クラス数	5 クラス
正課・非正課	正課（全学部）	履修者数	約420名
必修・選択	必修（全学部）		
配当年次	1 年・後期		

注：4. 調査結果の分析にもある通り、本稿では2年前期（再履修者）データを扱っている。

図表4 「キャリアデザイン」授業（1授業あたり）の運営概念



注：グループワークを行う際に、自由な議論を推奨している。また、話した内容をポートフォリオ化しているため、内容は必ずワークシートへの記入を義務付けている。

課題

はじめに注意したことは、教科書²²そのままを前提に授業を展開しなかったことである²³。つまり、課題解決型のテーマとなる題材を教科書から選び、それに沿った課題を設定し学生へ提示してから、個人ワークで先ず考えてもらった²⁴。その後、グループワークで課題に対する意見を、2名で一組から4名

で一組の範囲でシェアをしていった。これは、課題や事象に対する自分の意見が一般化できるよう、コミュニケーションを通じて関連するディスコースを強化していったためである²⁵。

教科書

例えば、大企業と中小企業の定義について、統計的データを用いることで曖昧さを減減させていった²⁶。教科書として採用している、『キャリアのみかた図で見る110のポイント』では、統計的なデータを根拠資料としてテーマに対する解釈の糸口を設けている。学生自らが考えたことが、ニュースやSNSなどの一部偏向された誤った情報から来たものならば、これら統計的なデータの解釈事例を通すことで、学生の情報収集力や情報分析力を強化することにもつながる²⁷。

ビデオ

ビデオ教材の位置づけは、産業（つまり2次産業や3次産業など）の業界軸と、雇用形態（つまり専門職や管理職など）の業種軸を置きながら、学生が業種間（雇用形態間）を比較考察できる仕組みにしている。例えば、弁護士という職種に関するビデオには、3次産業で専門職の度合いがどうしても高くなってしまう²⁸。そこで、図表5にあるマトリクスの位置に対応するビデオを毎授業変える（位置を変える）ことで、業種に向けた偏向的な考え方を意図的に排除している（図表5）。また、どのビデオ使った場合でも、①その職業に就いた登場人物はなぜその職種を選んだのか、②その職業を通して社会に対して何をしたいのか、③その職業へたどり着くプロセスに必要なコンピテンシー²⁹は何であるのか、学生に対して問うことにしている。

グループワーク

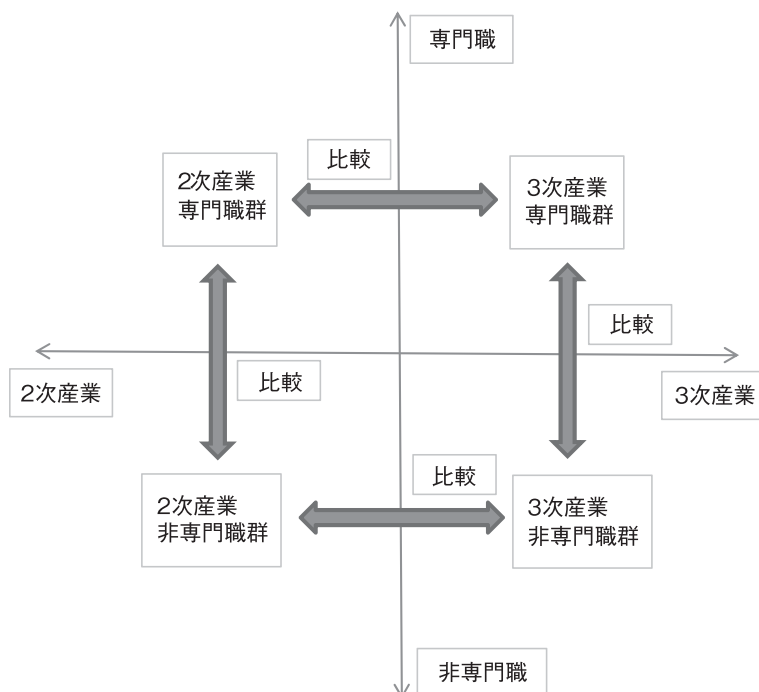
グループワークでは、ピアワークとピアレビューを基本形としているが、時には4名で一組を構成する場合もある。そして、職業に向けた意識の涵養と職業に向けた大学生活の送り方の設計については、意見をシェアしながらワークシートへ記入する。ワークシートは、授業の最後で作成する課題レポートなど

を参照するため、テキストや配布資料とともに保存をするよう指示している。集めた情報を、必要に応じて再び引き出せる力も、社会人基礎力（基礎学力やITスキル）として求められると思うからである。

リアクションペーパー

リアクションペーパーは、「本日学んだこと」「授業内容の質問」などが記入項目にあり、授業の質問には翌週の振り返りで教員が回答し、そのとき同時に前週の復習を行うようにしている。授業の連続性が毎回あることを学生へ示唆し、欠席できないような状況をつくっている。

図表5 ビデオ教材の位置づけ



注：産業や職種を比較しながら、それぞれのマトリクスをぐるぐる回すように、偏りを排除するような運営をしている。

課題レポート・ルーブリック・テキスト分析

ルーブリックは、課題レポート（400字原稿用紙に「授業要旨」「気付き＆将来への取組」）の作成と同時に学生へ配布（または明示）している。課題に対して、学生が教材にある記述を根拠として引用し、一般化した意見をまとめることができるかを見ている。そして課題レポートを、ルーブリックにもとづき採点し、採点結果と課題レポートの語句に見られる特徴を、テキスト分析を通して調査している。これは、授業改善や教材開発など FD 全般への反映が、今後期待されるものでもある。

4．調査結果の分析

4.1．調査（試験）の実施

授業の成果を測るために、毎週授業中に課題レポートとして「テーマの課題」「課題に対する意見」について、400字原稿用紙に2段落構成で課題解決に向けた記述をさせている。全15回（つまり15問）の授業から、全く同じ問題を学期末試験に4問出題することを学生には告知し、そのうちの1問に対してテキスト分析を行った。

- 調査（試験）対象：「キャリアデザイン」を受講した、全学部（法学部、経済学部、国際関係学部）の、再履修生にあたる2年生以上の学生。
- 調査（試験）方法：学期末試験（定期考査）における記述式回答
- 回収数：43
- 分析方法：計量テキスト分析のフリーソフトウェア、KH Coder によるテキストマイニング。

なお、単位を修得できる要件である出席回数を満たした学生が43人であり、この調査対象人数は当該の約2/3にあたる人数であった。出題した問題は、「コミュニケーション能力について、わかることを400字以内でまとめなさい」という内容であった³⁰。この出題は第6回目の授業でも扱っており、『街場の共

同体』と『わかりあえないことから』からも、指定教材に加え参照教材として活用していた³¹。また、映像資料として TED×Sapporo のビデオを参照している³²。

4 2 . 調査（試験）結果の分析

回収した回答をメモ帳³³へ入力し、そのテキストを KH Coder で計量テキスト分析を行った。KH Coder を用いてテキストデータの分析を行うためには、まずデータ中から自動的に語を取り出し、その結果をデータベースに格納する前処理を行わなければならない。その際に、強制的に抽出する語を選択することができるため、「コミュニケーション能力」をここでは入力してある。回答をルーブリックに従い採点し、「上位」をA群、「中位」をB群、「下位」をC群と結果群の分類をしたうえで、各群に出現する言葉をまとめたものが図表6 1から図表6 3である。A群は、10点満点中で7点から10点の層にいた7名の答案を、計量テキスト分析した結果である。B群は、10点満点中で4点から6点の層にいた21名の答案を、計量テキスト分析したものである。C群は、10点満点中で0点から3点の層にいた15名の答案を、計量テキスト分析したものである。

ここで、出現回数が2回以上みられる抽出語に限定した場合には、A群の抽出語数はB群やC群のそれに比べ上回っていることがわかる³⁴。また、出現回数が2回以上みられる抽出語の個数は、A群に比べB群やC群のそれに比べ上回っていることがわかる。回答の文字数制限は、全群ともに260文字以上300文字以内に（共通）指定してあったので、B群やC群のなかにある語彙数が少なかった可能性がある。そして、全群ともに「人」「能力」「相手」「伝える」など、文章を構成する語彙が共通して見出されたことである。つまり、文章を構成する主要な言葉は同じなのに、その出現回数が異なっていたということがわかる。

図表 6 1 A群回答の抽出語と出現回数 n = 7

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
コミュニケーション能力	90	現代	5	対応	3
人	71	言う	5	適切	3
能力	57	雇用	5	特に	3
相手	50	向上	5	難しい	3
思う	41	使う	5	二つ	3
コミュニケーション	40	上手	5	日常	3
伝える	29	伝える	5	入る	3
社会	26	無い	5	物事	3
自分	25	立場	5	文化	3
考える	24	お互い	4	変わる	3
仕事	21	挨拶	4	目	3
会話	20	気	4	話題	3
会社	19	個人	4	いま	2
力	19	行動	4	たくさん	2
言葉	17	合わせる	4	だめ	2
大切	16	事実	4	やり取り	2
話	16	出来る	4	スムーズ	2
話す	16	少ない	4	意志	2
企業	15	場合	4	印象	2
重要	15	仲良く	4	営業	2
理解	15	得意	4	影響	2
出る	13	日本	4	解決	2
大事	13	分かる	4	学歴	2
聞く	13	問題	4	活かす	2
高い	12	様々	4	活動	2
上司	12	要求	4	活用	2
必要	12	ほか	3	環境	2
一つ	9	コミュニケ	3	観察	2
人間	9	ツール	3	関わる	2
意味	8	バランス	3	基本	2
求める	8	異なる	3	規	2
持つ	8	一番	3	起こる	2
生活	8	価値	3	逆	2
部下	8	学校	3	協議	2
意見	7	管理	3	協力	2
上手い	7	簡単	3	経歴	2
生きる	7	経営	3	決めつける	2
知る	7	考え	3	見る	2
働く	7	高める	3	言える	2
いろいろ	6	最も	3	好く	2
ション	6	思い	3	考	2
外国	6	若者	3	行為	2
関係	6	取る	3	高齢	2
交流	6	取れる	3	合う	2
行う	6	就職	3	国	2
社員	6	重視	3	国際	2
身	6	上	3	今	2
人々	6	信頼	3	最近	2
労働	6	疎通	3	採用	2
意思	5	組織	3	作る	2

図表 6 2 B 群回答の抽出語と出現回数 n = 21

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
人	41	分かる	4	合わせる	2
コミュニケーション能力	39	無い	4	今	2
能力	23	立場	4	最も	2
相手	22	異なる	3	始める	2
コミュニケーション	19	企業	3	社員	2
話	16	言う	3	若者	2
思う	14	個人	3	弱い	2
伝える	14	雇用	3	主張	2
自分	12	向上	3	取れる	2
会社	11	使う	3	処遇	2
考える	11	思い	3	少ない	2
力	11	持つ	3	場	2
仕事	10	出る	3	信頼	2
社会	9	上手	3	身	2
聞く	9	人々	3	前	2
大切	8	知る	3	疎通	2
理解	8	適切	3	増える	2
意見	7	日本	3	対応	2
上司	7	目	3	団体	2
会話	6	いろいろ	2	仲良く	2
言葉	6	やり取り	2	通じる	2
重要	6	バランス	2	伝わる	2
上手い	6	意志	2	伝達	2
部下	6	意思	2	動作	2
話す	6	解決	2	日常	2
働く	5	外国	2	年配	2
必要	5	活動	2	発言	2
お互い	4	環境	2	発信	2
ション	4	管理	2	非常	2
挨拶	4	関わる	2	物事	2
意味	4	気	2	文化	2
一つ	4	協力	2	聞き入れる	2
関係	4	見る	2	変化	2
求める	4	現代	2	望ましい	2
行う	4	交流	2	問題	2
場合	4	好く	2	要求	2
人間	4	行動	2	話題	2
生活	4	高い	2		
大事	4	高める	2		

次に、出現パターンの似通った語（すなわち共起の頻度が強い語）を線で結んだ、共起ネットワーク分析を行ってみた³⁵。分析の際に設定する、登場語の最少出現数と描画数は全群とも同じ条件にしてある。ここで、共起関係の強弱については、分析の対象になった語のすべての組み合わせについて分析してい

図表 6 3 C 群回答の抽出語と出現回数 n = 15

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
コミュニケーション能力	49	得意	4	最近	2
人	34	ション	3	作る	2
能力	28	ツール	3	使う	2
思う	24	一つ	3	若者	2
コミュニケーション	21	簡単	3	取る	2
相手	18	関係	3	手段	2
伝える	16	経営	3	周り	2
社会	15	現代	3	就職	2
会話	12	交流	3	重視	2
企業	12	人々	3	上	2
考える	12	知る	3	上手	2
仕事	12	仲良く	3	信頼	2
自分	11	伝わる	3	生物	2
高い	10	様々	3	声	2
話す	10	理解	3	責める	2
重要	9	たくさん	2	赤ん坊	2
出る	9	だめ	2	存在	2
大事	9	ほか	2	働く	2
会社	7	コミュニケ	2	特に	2
大切	7	意思	2	難しい	2
必要	7	一番	2	入社	2
言葉	6	印象	2	売り込む	2
生きる	6	営業	2	部下	2
いろいろ	5	価値	2	分野	2
持つ	5	学校	2	変わる	2
上司	5	学歴	2	方法	2
人間	5	観察	2	無い	2
力	5	気	2	面接	2
労働	5	起こる	2	問う	2
外国	4	逆	2	問題	2
求める	4	協議	2	役割	2
事実	4	経歴	2	友人	2
社員	4	決めつける	2	有利	2
少ない	4	雇用	2	要求	2
身	4	向上	2	理由	2
生活	4	行為	2	連携	2

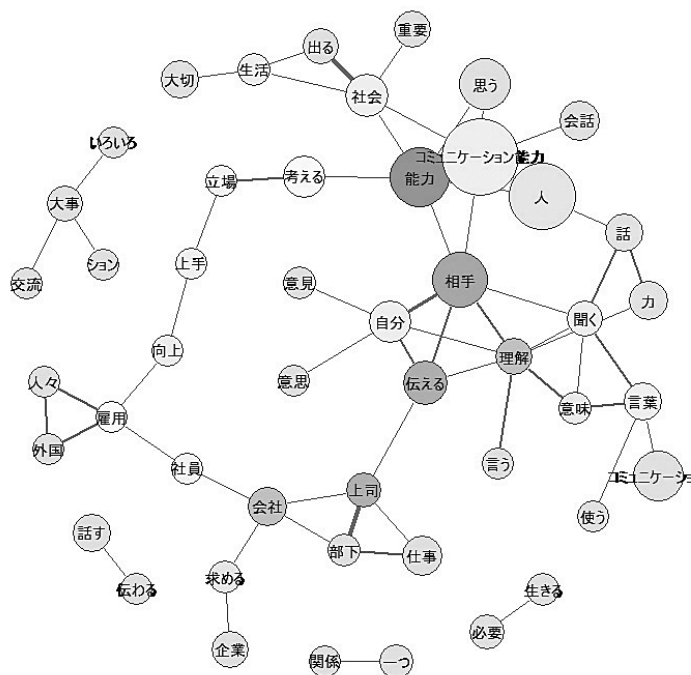
る。

出現数の多い語ほど大きな円で描かれており、強い共起関係にある語ほど太い線で結ばれている。また、それぞれの語がネットワーク構造の中で、高い中心性を示すものは濃いグレースケールとして染められている³⁶。図表 7 1 から図表 7 3 を比べると、明らかに A 群が B 群や C 群より共起関係にある語句の秩序性がみられる。共起ネットワークにある「線」が、中心性の高い語を中

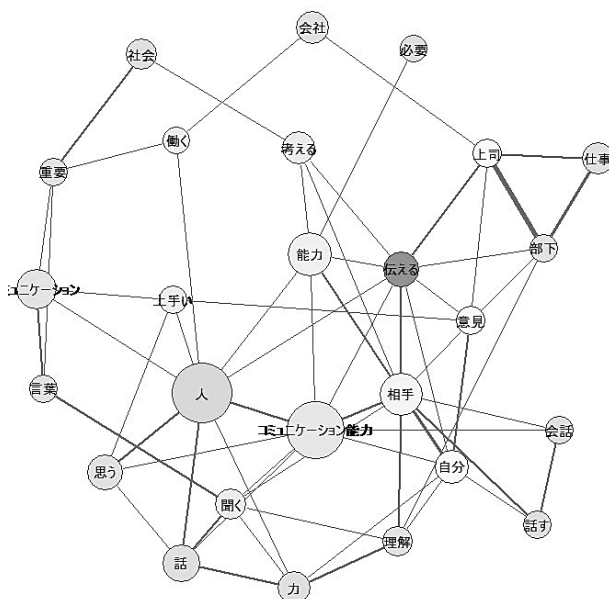
心として散らばっている様子が、A群では極めて順序だっているからである。またA群の特徴として、中心性の高い語ほど出現数も多く、両者の共起関係の位置がとても近いことがわかる。B群では、出現語数が多いものが必ずしも中心性が高くなく、また共起関係にある語の結節が均等にみられる。C群では、出現語数が多いものと中心性が高いものが認められるが、そこから発する線の少なさや周辺にある語数の少なさがA群やB群と比べ特徴的である。

ここでわかることは、A群は中心性の高い語を中心に、文章の組み立て方に一貫性または規則性があるということである。それに比べ、B群は語数の多さが中心性の強さと一致しておらず、共起関係の語がランダムに結ばれていることから、とにかく多くの言葉を並べる記述をしている可能性がある。そして、

図表7 1 A群回答の共起ネットワーク分析 n = 7



図表 7 1 B群回答の共起ネットワーク分析 n=21

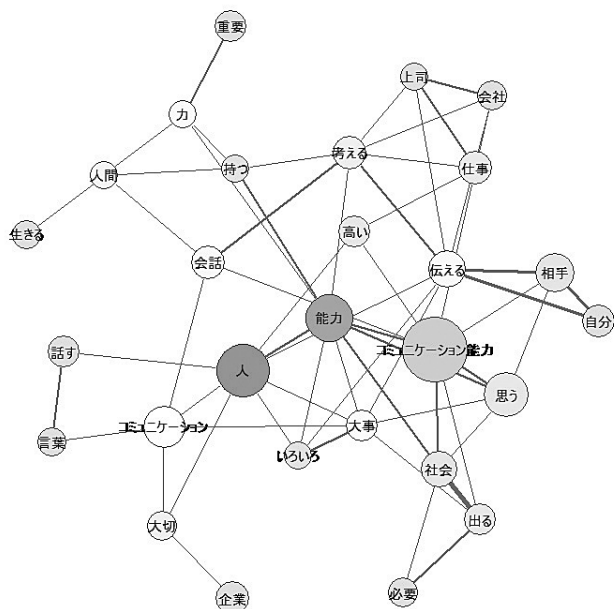


C群では語数の多さや中心性はある程度認められるものの、その周辺にある語との共起関係が弱いことから、文章の展開を論理的に進められていない可能性がある。

4 3 . 調査 (試験) 結果の考察

ひとつひとつの回答を改めて読み直していくと、B群では同じ説明内容の文脈が2回程度登場するケースが21人中18人まで認められた。例えば、起こしで「コミュニケーション能力とは～である」と書き、結びで「コミュニケーション能力とは～である」とまとめる書き方である。多い場合には、表現を少しだけ変えて3回同じ言い回しをしている回答もあった。さらに、これら21人の過去に提出された課題レポートを確認すると、次のような特徴が認められた。それは、テーマを決めて文章を作る能力はあるが、状況依存的に書きすすめて

図表 7 3 C群回答の共起ネットワーク分析 n = 15



いるのである。つまり、書きながら自由に意図や表現を調整することはできても、全体の構想をしっかりと立てていなかったのである。これは、調査した回答にもあてはまる特徴であり、生成された命題を言語に置き換えることは出来たが、構想を立て書き進める命題の生成（体制化や目標の設定）力が弱かったのではないと思う。C群では、「コミュニケーション能力とは～である」と書いたものの、その先に続くべき生成された命題を言語に置き換える過程が、15人の回答のなかに一つも認められなかった。例えば、コミュニケーション能力が会社のなかで、上司と部下の間や社員とお客様の間で成り立という関係性が、言葉を探し出す過程で作られてこないものである。

5 . おわりに

本稿では、「キャリアデザイン」授業における、伝える力つまり命題の生成力について、学力層別にどのような特徴があるのかを資料としてまとめた。しかしながら、授業運営や効果測定の方法については、いくつかの課題や改善すべき点が残っている。まず授業の方法であるが、PBL 型授業など工夫しているつもりでも、フリーライダーを主体的に授業に参加させる工夫が欠けていたということである。見た目上は、どの学生も授業で出題された課題を理解しているようにみえたが、課題レポートを書く段階になると命題生成の目標設定ができない学生が少なからずいたのである。そのため、書くことに関する個人差が授業によってばらつきはじめ、学期末試験でも期待された効果が必ずしも全員に認められなかったのである。この点については、例えば3回目の授業と9回目の授業で全く同じ課題レポート学生に書かせ、上達の程度を確認し結果をフィードバックすることで、モチベーションを高め書く力を伸ばす工夫を今後していきたい。また、グループ・ワークについて慣れた学生同士での議論が、文章の構想を立てる過程に影響を与えていたのかも知れないので、学生の様子をみてグループ・メンバーを常に入れ替えるようにしていく³⁷⁾。考課の測定方法についても、授業の開始直後と終了直前との比較や、自由記述のアンケートを集めるなど、測定法の組み合わせを複線化していこうと考えている。なぜなら、偶然やる気のない者同士のなかでグループ・ワークを行うことになった学生は、授業へのモチベーションが一気に下がってしまったという事例をみていたからである。

学生の中には、学業をはじめ日常生活に至るまで成功体験がないままでは、将来のキャリアの展望も描けないという者もいる。そのため、自分自身に対して自信が持てないから、就職活動や仕事に就くことにも懐疑になっている可能性もある。そこで自分自身の考えを、根拠をもって述べたり書いたりすることができれば、自分自身に自信がついていくのではないだろうか。そのために

は、課題解決型の授業やトレーニングを通し、生成された命題を言語化する訓練が必要となってくると思う。そのためには、獲得された言葉を文脈の中で上手く運用するとともに、ガーデンパス現象を引き起こさない仕組みを授業や教材へ組み込んでいきたい³⁸。

注

- 1 テキスト型データの計量的な内容分析を行うソフトウェアであり、立命館大学産業社会学部の樋口耕一准教授が開発したフリーウェアである。本稿では、多変量解析の共起ネットワークなどを活用している。
- 2 語彙上の結束性とは、特に上位語を説明する語彙的な結びつきを、まとまりのある言語表現を構成するために必要な要素として示している。橋内武『ディスコース 談話の織りなす世界』くろしお出版、1999年、pp 55 62。
- 3 強制出力した語句に対して、実際にどの程度のコロケーションが用いられているか、それぞれの結びつきや他の言語との結びつきについて分析をした。
- 4 ルーブリックを用いた理由は、「何を」「どの程度」理解していれば評価が加わるのか、予め学生に対して尺度を示していたからである。従って、尺度項目などについては、授業中に扱う課題レポートと学期末試験は同一のものにしてある。また、本稿でたびたび出てくるルーブリックの実物を、次にある公開リンクより参照できるようにした。

<https://dl.dropboxusercontent.com/u/69819498/%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%83%96%E3%83%AA%E3%83%83%E3%82%AF.doc>

- 5 経団連が毎年7月ごろ実施する、「新卒採用（当該年の4月入社）に関するアンケート」が企業会員に対して行っており、過去10年間をみてもコミュニケーション能力が長らく求められている。
- 6 コミュニケーション教育推進会議は、推進会議委員に平田オリザ氏（劇作家、大阪大学教授）を加えるなど、演劇活動の表現手法を教育現場へ試行的に導入する試みでもあった。
- 7 経済産業省の調査によると、企業が大学生に対して不足を感じる力はコミュニケーション能力が最も高いが、学生はコミュニケーション能力が不足していると認識していない。平成21年度就職支援体制調査事業、「大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上に関する調査」に詳しくある。この傾向は、ベネッセをはじめ民間企業が調査した近年の結果も、ほぼ同じ傾向があ

- 102 -

83% AA%E3%82%A2%E3%83%87%E3%82%B6%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%82%B7%E3%83%A9%E3%83%90%E3%82%B9.pdf

- 17 母集団は大学単位で計測したため、年度ごとの比較や他の大学等との同単位での比較が可能になる。
- 18 本稿では、再履修の学生に対して開講したクラスの受講生が、どのように挽回するかも調査し資料を集めている。ここでは、テキスト分析を中心に、その結果について考察していく。
- 19 リアクションペーパーは、学内ではミニツペーパーという呼称を用いている。次にある公開リンクより参照できるようにした。
<https://dl.dropboxusercontent.com/u/69819498/%E3%83%9F%E3%83%8B%E3%83%83%E3%83%84%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%83%91%E3%83%BC.pdf>
- 20 課題レポートを採点した実物を用い、スクリーンに投影しながら採点基準を明示している。実物は、複数の学生の答案を混ぜたものを、教員が独自に作成したものをを用いている。
- 21 リアクションペーパーと課題レポートを回収し、双方の内容に矛盾点が無いかどうかを教員がチェックしている。論理的な飛躍や独りよがりの解釈があれば、それは減点の対象にしていることも（減点部）評価基準の一つとなる。
- 22 教科書は、阿部正浩（編集）松繁寿和（編集）『キャリアのみかた 図で見る110のポイント』有斐閣、2014年を使用している。
- 23 例えば、ピグマリオン効果の定義を一方的に説明するのではなく、課題やテーマを扱いながら意味付けを行った。知り得た知識を、断片的に記憶するのではなく、学生自身で一般化できるよう働きかけた。
- 24 授業中では「課題」という言葉は用いず、「問題」という言葉を用いている。初年次の学生にとって、高等学校の生活言語のほうが馴染みやすいため、「問題を出します」という表現にしてある。
- 25 ここでのディスコースとは、ある言葉（文脈）対して、どのように考え、どのように振る舞うべきであると考えているかも含め、その取扱いに注意を払っている。ディスコースを理解していくことは、あえて言い換えれば「世間の価値判断」を見つめていくということである。
- 26 大企業は優良で、中小企業はすべてブラック企業だという、極度に誤った考えを持っている学生も存在する。
- 27 大卒者として社会が求める問題解決能力（知識を活用し問題を解決する能力）を、「情報収集力」「情報分析力」「課題発見力」「構想力」という、問題解決のプロセスに不可欠な4つの要素で測定・評価する方法がある。本稿で、数的計量まで踏み込むことはしないが、PROGテスト（河合塾他主催）の評価と連動

をさせている。

- 28 ここで用いるビデオは、例えば NHK が制作している「プロフェッショナルシリーズ」を活用しているため、単なる職業紹介をしているわけではない。
- 29 コンピテンシーの定義については、次にある公開リンクから OECD 作成の PDF 資料が参照できるようにした。
- <https://dl.dropboxusercontent.com/u/69819498/Key%20Competencies.pdf>
- 30 本稿の「1. はじめに」で、コミュニケーション能力について言及しているところがあるが、ここで出題した問題（タイトル）とは関連性はない（偶然、そのタイトルになっただけである）。
- 31 内田樹『街場の共同体』潮出版社（2014）と平田オリザ『わかりあえないことから』講談社（2012）を参照し、両筆者のコミュニケーション能力に関する定義を紹介している。
- 32 Hope invites, Tsutomu Uematsu, TED×Sapporo は、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスの条項に従って視聴している。
- 33 Windows に格納されている「メモ帳」を用いるか、Office2010などに格納されている Word を活用している。
- 34 KH Coder は、「死ぬ」「死ねば」「死んで」「死にたい」「死なれた」などは、すべて「死ぬ」という1種類の語として抽出している。
- 35 共起とは、任意の文書や文において、ある文字列とある文字列が同時に出現することである。例えば、就職に関する話題の中では、「就活」という言葉と「スーツ」という言葉などは、同時に出現する場合が比較的多い。コーパスからコーレクションを抽出することを、単語共起表現の抽出と示すことがある。
- 36 中心性の種類は、ここでは「媒介中心性」「次数中心性」「固有ベクトル中心性」すべてに対応している。
- 37 例えば、同じ部活動（サークル）同士の学生が集まると、普段生活の延長線上でなれ合いになってしまう。その結果、いい加減なレポートや相互丸写しのレポートが作られてしまう。
- 38 針生悦子（編）『言語心理学』朝倉書店、pp 59 61 。

参考資料

樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版、2014年